



「2.43 清隆高校男子バレー部」
壁井ユカコ/著 集英社 (YFカ)



東京の強豪校から田舎の弱小バレー部にやってきたのは、ワケあり天才セッターの灰島公誓。高い身体能力を生かしきれない黒羽祐仁とは幼馴染だったが、灰島とチームの間に大きな溝ができてしまい、部はバラバラになってしまった。そして進学した高校のバレー部に、灰島の姿はなかった。だがバレー部の主将・小田は灰島を入部させたいと考えていて…。


「翼を持つ少女 BISピリオバトル部」
山本 弘/著 東京創元社 (YFヤ)



中高一貫の美心国際学園 (BIS) 高等部に転校してきた伏木空は、SF 小説大好き少女。本は好きだけど、ノンフィクション一辺倒の同級生、埋火武人の誘いで「ピリオバトル部」に入部することになる空。自分の好きな本を紹介して、その中からチャンプ本を決めるといふピリオバトル。たくさん紹介される本のなかに、あなたの気になる本があるかもしれませんよ？


「かがみのもり」
大崎 梢/著 光文社 (YFオ)

新任の中学教師、片野のもとに教え子の笹井と勝又がもちこんだのは、不思議な金色の社の写真だった。しかし周囲の誰もがその社がある山へ近づくことにいい顔をしない。やがて怪しい組織や謎の美少女までが現れて…。ふりかかるとピンチをはねのけて、彼らは神社の奥宮に隠された謎にたどりつくことができるのか？




「ABC! 曙第二中学校放送部」
石川朔久子/著 講談社 (YFイ)

みさとと機材オタクである古場のたったふたりだけの放送部は、廃部の危機にさらされていた。新しい部員としてやってきたのは、下級生の珠子といわくつきの美少女・葉月。そして野球部を休部中のクラスメイトの新納だった。「声は伝えるためにある。だれかを黙らせるためじゃない」弱小放送部の小さな声は、やがて大きく響き始める。




「ほくらが旅に出る理由」
山下 卓/著 エンターブレイン (YFヤ)

その夏、ほくは、旅に出た。中学2年のコウは、五千円札1枚を握りしめ、大島行きの船に乗り込んだ。姉貴のいなくなった初めての夏をどうすごしていいかわからなかったから。船で出会った少女リンコの重い過去に触れたコウは、「ガキ」なりのやりかたで彼女を救おうとする。



「ブルー・バック」
ティム・ウィントン/作 さ・え・ら書房 (933ブ)

オーストラリアの入江に住む、大きな青い魚ブルーバック。その姿を心にいだきながら、少年エイベルは海洋生物学者となった。そんなとき、母のドラが暮らす故郷の入江には、さまざまな災厄がふりかかっていた。豊かな自然とともに生きることの素晴らしさを感じるこのできる1冊です。



「夕焼けカプセル」
泉 啓子/著 童心社 (YFイ)


中学校に入学した沙良は、クラスでも元気のいい晴香に声をかけられたものの、おとなしい性格からなかなかなじめずにいた。そんななか「好きな人」の話になり、とまどっていた沙良に「おまえさ、いやなら、ことわれよ」と突然声をかけてきたのは同じクラスの男子生徒の寺沢だった。『レッスン1』。思春期の女の子の等身大の姿をえがいた3つの物語。

「ほくを探しに」
シルヴァスタイン/作 倉橋由美子/訳 講談社 (Eボ)

「何か足りない それでほくは楽しくない」そんなフレーズから始まる絵本。自分に足りない「何か」。野を越え海を越えて、ようやくみつけたと思った「ほくのかげら」は、いまひとつ合わないものが多くて…。ほんわりしたイラストと一緒に、あなたも自分のかげらを探してみませんか？

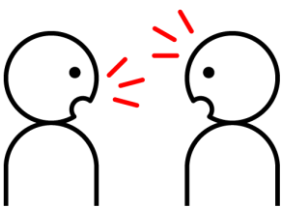
「理由(わけ)あって冬に出る」
似鳥 鶏/著 東京創元社 (YBF二)

芸術棟に、フルートをふく幽霊が出るらしい—。そんな噂を否定すべく、吹奏楽部部長に協力をもとめられた美術部の葉山君は、文芸部の3年生である伊神さんとともに、にわか放課後探偵団として謎ときに挑むことになる。はたして幽霊騒ぎの真相とは？



「言葉はなぜ生まれたのか」
岡ノ谷一夫/著 文藝春秋 (Y481コ)

地球上にたくさんいる生き物の中で、人間だけが使うことができるもの。それは「ことば」です。日常で何気なく使っている言葉は、いったいどこからやってきたのか。さて、疑問は解けるのでしょうか？




「パティ 大切な相棒」
V.M.ジョーンズ/著 PHP 研究所 (Y933バ)

ジョシュはスポーツも得意で、成績だって悪くない明るい少年だ。けれど彼にもひそかに抱える問題があった。父さんの新しい彼女スーザンのこと、それから「相棒」と呼んでいる双子の兄のこと。幼いころの事故で兄が障害を負ってから、水が怖くなってしまったジョシュは、ライバルに勝ちたいという思いから、泳げないというハンデを克服し、トライアスロンに挑戦することになる。


「林業少年」
堀米 薫/著 新日本出版社 (913ホ)

5年生の喜樹の祖父・庄蔵は山を持っていて、そこで働いている。けれど喜樹の父も母も、別の仕事につき、祖父の仕事をあまりよく思っていないようだった。ある日、山の百年杉を買いだいたいという人がやってきたことをきっかけに喜樹と姉の楓は林業という仕事の魅力にひかれていくようになる。



「ボクたちに殺されるいのち」
小林照幸/著 河出書房新社 (Y645ボ)

あなたの家にペットはいますか？ 犬猫をはじめ、いろいろな種類の生き物が家族の一員として多くの家で暮らしていることでしょう。けれどその中には、飼い主の勝手な都合で捨てられてしまう命があるのです。




「ラスト・ショット」
ジョン・ファインスタイン/作 評論社 (Y933ラ)

13歳のスティービーはスポーツ記者志望。記者コンテストで優勝したことで、夢にまで見たカレッジバスケットボールのファイナルフォー (準決勝戦・決勝戦) へ記者として招待された。ところがそこでスター選手が脅迫されているのを聞いてしまう。思いがけない事件の解明に乗り出すスティービーだったが…。

「僕たちの国の自衛隊に21の質問」
半田 滋/著 講談社 (392ボ)

「平和国家」といわれる日本。その日本で、いま大きな変化が起ころうとしています。これからの日本を担う君たちに、知っておいてほしい21の項目について書かれています。難しい問題ですが「知らない」「わからない」ままではすまないのです。わたしたち自身の未来のはなしを考えてみましょう。



「1リットルの涙」
木藤亜也/著 幻冬舎 (YB916イ)

恐ろしい病魔に襲われた15歳の少女・亜也。命の尽きるそのときまで、精一杯生きぬいた彼女が書き続けた日記をもとにしたロングセラー。

「ふしぎの国のアリス」
ルイス・キャロル/作 福音館書店 (Y933フ)

出版150周年を迎えた「アリス」。お話を知っているようで知らない人、多いのではないですか？ぜひこの夏に読破してみよう！

